

都小国研全体研究主題

未来を拓く国語教育の創造

—評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり—

読むこと部会研究主題

学びの質を高める、評価活動と指導の工夫

1 都小国研・研究主題の設定について

平成29年3月に告示された学習指導要領の全面実施3年目を迎える。「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理された国語科において、育成すべき「資質・能力」を明確にした実践を、より一層推進していくことが求められる。

GIGAスクール構想に基づく一人1台端末などの整備は急速に進んでいる。令和3年1月26日には、中央教育審議会より『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)が示された。全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現していくことが、「令和の日本型学校教育」の姿として求められている。子供たちの新たな学びの姿を模索し、創造していく時代が始まっている。

本会では、平成27年度より研究主題を「未来を拓く国語教育の創造」と設定し研究に取り組んできた。「未来を拓く国語教育」とは、国語科において児童が豊かな言葉の力を身に付け、他教科の学習や日常生活に生かしていく豊かな言語生活者を育成することである。

令和2年度より学習指導要領が全面実施となったことに伴い、副主題を「評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり」として研究を進めてきた。改めて国語科としてどのような資質・能力を育成していかなければならないのかについて明確にし、共有していく。またその成果について適正な学習評価を実施して教師の授業改善や、児童の学習改善につなげていく必要がある。そして、学習の系統上の次単元や他教科の学習、日常生活の中で活用を図ることにより、言葉の力の定着を確実なものとしていく。その過程において通常の学級にも複数名在籍していることが想定される配慮を要する児童に対しても「個別最適な学び」を実現することや、ICT機器を活用した「協働的な学び」を活性化することにも取り組む。どのような力を身につけていくのかを学習者自身が自覚することにより、「粘り強い取組を行おうとする態度」や「自らの学習を調整しようとする態度」の伸長を図り、生涯にわたって学び続けることができる自立した学習者を育てていきたい。

特に見通しをもって学習に取り組むことや、活動ごとに自分の学習を振り返ることで、次にどのように学習を進めていくかを繰り返し計画・行動し続けて学習を完了させる態度を重視する。「学習評価は、学校における教育活動に関し、児童生徒の学習状況を評価するもの」(「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料より)であり、教師が評価規準を定め、評価場面や評価方法等を計画して実施する。しかし、「評価」という言葉は、観点別学習状況の評価を指す場合や、評定や個人内評価を含めたものを指す場合もある。教師の学習評価と共に、児童が自らを評価し、学習改善に進んで取り組もうとする意欲の引き出し方や、活動のさせ方についても研究を深めていくために、研究副主題を「評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり」とする。

今年度も、研究主題と研究副主題を継続し、「未来を拓く国語教育の創造—評価活動の充実を通して、学びの質を高める単元づくり—」として研究をさらに深めていくこととする。

2 研究主題に迫る観点

(1) 学習の充実及び質の向上を図る単元づくり

- 学校・学級・個々の子供の実態に応じた、学びの必然性がある指導の充実
(適時性、地域性、学校・学級が育んだ独自の文化的な土壌、子供の個性等を生かす視点の重視)
- 豊かな語彙の拡充につながる指導の工夫
- 学習の成果物等の活用・共有を図ることによる、学びを積み重ねる指導の工夫

(2) 学習改善・授業改善につながる評価活動の充実

- 評価規準、評価方法の明確化
- 教師・児童・保護者との間での評価の共有
- 児童の学習状況の把握の仕方の工夫
- 指導過程に応じた評価や長期的な視点での評価の工夫
- 次の学習に生かす評価やつながりを意識した評価
(課題・活動・評価・次なる課題…のサイクル)の工夫
- 児童が自らの学びを振り返り、調整できる学習過程の工夫
- 児童が学びの変容を自覚できる自己評価、相互評価の工夫

(3) 国語科及び他教科・他校種等との連携による学習活動の活性化

- 前単元で育成した力は今単元でどのように活用されるのか、今単元で育成した力は次単元でどのように活用されるのか、幼保小連携、小中一貫教育も視野に入れた系統性を重視した指導の推進
- 「社会に開かれた教育課程」や「教育課程全体の中での国語科の役割」について自覚し、国語科で育てた力が他教科等でどのように生かされるのかなど、活用を意識した実践の充実
- 特別支援教育の実践との連携を図り、言葉の教育としての拡充・深化・学習活動を行う場合に生じる困難さが異なることに留意し、個々の児童の困難さに応じた指導内容や指導方法を工夫することで、全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」を実現する。

3 多摩地区研究会読むこと部

多摩地区研究会読むこと部では、都小国研の主題を受け、自分で学習を進めることができる単元計画と、児童が主体的に学習に取り組むための評価活動の充実に重点をおいて研究を進めた。

(1) 本単元で深めていこうとしている学びの質について

本単元では、要約する目的を明確にして要約の必要性を実感させ、要約の手順を確かめながら目的に沿って学習材を要約する。手順を押さえて要約する中で、児童自身が工夫したり友達工夫を見付けたりしたものを「要約のポイント」とし、それを学級で共有しながら、要約の仕方の定着を図る。そして、共有したことを基に要約した文章を読み直し、加除修正することでよりよい要約を目指していく、という学び方を習得させたい。

(2) 学びの質の向上を図る単元の工夫

①単元の目標と単元を通して身に付けさせたい力を設定した意図

本単元では、要点をまとめるという3年生の学習経験や、具体的な事例を省いて話題や主張を中心に短くまとめ、決められた字数で要約するという4年生のこれまでの学習経験を生かして、要約する中で気付いたことを「要約のポイント」として全体で共有し、ポイントを取り入れながら要約する力を身に付けることに重点を置いた。また、単元の中で要約に繰り返し取り組むことで要約の力を定着させることができると考え、学習材の「中」の部分の前後半に分けて要約することとした。前半部分の要約で手順を理解しながら要約し、友達と要約した文を読み合う中で気付いた「要約のポイント」を全体で共有する。その後、後半部分で改めて要約をし、前半部分の要約の際に身に付けたことを活用できるようにする。さらに、第三次では、第二次で身に付けたことを活用して全文を要約することで、

本単元の目標を達成できるように単元計画を立てた。

本単元で身に付けさせたい力は以下の通りである。

- 要約の手順を理解し、目的に応じて自力で要約する力
- 要約する際に自身の気づきを確認めたり、友達の要約のよいところを見付けたりする力
- 要約した文章を読み合っ、気付いた要約のポイントを共有する力
- 共有したことを基に、自分の要約した文章を加除修正する力

②主体的、対話的で深い学びの視点での授業改善につながる工夫

本単元では、導入時に実際に和紙に触れる時間を設定し、児童が使い慣れている洋紙とは異なる風合いや趣のある色遣い、模様などの「和紙の魅力」に気付くことができるようにした。和紙の魅力を何となく感じ始めている状況で「和紙の魅力」について具体的に書かれている学習材と出合わせることで、「学習材を詳しく読みたい」「分かったことを誰かと共有したい」という思いを児童がもてるようにした。本単元では、「家の方に短時間で『和紙の魅力』について伝える。分かりやすく伝えるために、学習材の一部ではなく全体を要約する。」という学習の目的意識を第一次で児童が明確にもてるようにした。

要約の学習は、時として、「まず要点をまとめる。次に指定された文字数に合うように不要な部分を削る。」という機械的な作業になってしまう可能性が考えられるが、本単元では児童一人一人が「主体的な学び手」として学習に取り組めるように、次のような工夫を行った。

○既習の「学びの蓄積」を意識した学習活動の展開

児童自身が既習の学習経験で得た「要点のまとめ方」や「要約のおよその仕方」を振り返り、本単元でもその点を意識して、自身で見通しをもちながら学習に取り組むことができるようにした。

○共有を生かした「要約のポイント」の整理・深化

限られた文字数で要約するために、各段落の要点を基に中心となる語や文を見付けるとともに、不要な箇所は省いてまとめる必要性が生じる。要約した文章を児童相互で読み合う際に、中心となる語や文が記されているかを確認するだけでなく、分かりやすい文章にするためにどのように不要な箇所を省いたのかを確かめるように促すようにした。その中で、繰り返し出てくる言葉を一つにまとめたり、長い説明は短い言葉で置き換えたりするなどの「要約のポイント」に気付けるようにする。そのことで、もう一度自分の文章を加除修正してより分かりやすく要約できるようにした。

(3) 評価活動の工夫

①「児童にどういった力が身に付いたか」という学習の成果をとらえる評価の工夫

本単元は、中心となる語や文を見付けて要約する力の育成を目指して構成されている。各段落の要点をまとめ、それを基に文章の中(③～⑨段落)の部分に要約する。中の前半(③～⑥段落)の要約は学級全体で指導しながら行い、後半(⑦～⑨段落)の要約は児童が主体的に要約を行うことで、中心となる語や文の選び方や接続語の使い方、児童が考えて置き換えた言葉に注目し、要約の力の変容を見取る。また、その際に、要約するときに必要なことを「要約のポイント」として一般化する。さらに第三次では、その「要約のポイント」を生かして、文章全体を要約してみることによって児童がそれを活用できるかも捉えていく。

②教師が指導の改善を図るための評価の工夫

第二次では、3年生で学んだ既習事項を生かして、段落ごとの要点をカードにまとめさせることとした。ここで要点をまとめることを出来ているかを見取る。その際、既習事項が身に付いていない児童には要点のまとめ方を確認したうえで、掲示物を使って要点のまとめ方を共有するようにする。一方、要約することは、段落の要点を繋げるだけではできない。そこで、実際に要約する中で、要点を繋げるポイントを児童に考えさせる。そして、児童から挙げられた「要

約のポイント」をクラスで共有するようにしていく。

児童が自ら要約するポイントを見付け、中心となる語や文を落とさずに、字数に収まるように文章が書ければ、おおむね評価規準に達したとする。さらに、中心となる語や文を接続語を適切に用いて繋げたり、児童が置き換えた言葉が入っていたりすれば、十分評価規準に達したとする。第三次では、児童から挙げられた「要約のポイント」を用いてどの児童もよりよい要約ができるように働きかけていく。

③児童自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるための評価の工夫

児童が自分にどのような力が身に付いたのかを振り返り、自己評価する際には、既習の学習経験を基に学級全体で整理した「要約の手順」や本単元で学ぶ「要約のポイント」の視点を活用する。限られた字数で書かれていることを分かりやすく要約するためには、中心となる語や文を見付けて短くまとめたり言葉を置き換えたりしながらまとめる力が必要とされる。学習を振り返る際、自分が要約した文章を読み直し、「要約の手順」や「要約のポイント」の視点と照らし合わせて考えるようにすることで、どのような力が身に付いたのかを、児童自身で確かめられるようにした。

さらに、要約した文章を友達と読み合ったり学級全体で確かめたりした際に新たに発見した「要約のポイント」について児童自身が気づき、自分が書いた文章を加除修正したり、次時や次単元の学習に活用していこうと自ら学習を調整したりすることができるようにした。

(4)研究経過(参集及びリモートを活用しての開催)

令和4年5月13日(金) 東京都小学校国語研究会多摩地区研究会総会

8月4日(木) 第1回部会(立川市立第五小学校)

井出先生によるご指導

学習指導案、言語活動の検討

8月22日(月) 第2回部会(立川市立第五小学校)

井出先生によるご指導

学習指導案、言語活動の検討

10月17日(月) 第3回部会(立川市立第一小学校とリモート)

学習指導案、言語活動の検討

11月11日(金) 第4回部会(立川市立第一小学校とリモート)

井出先生によるご指導

学習指導案の検討

以上